朝鮮風俗画に見る民俗

福田 アジオ

1　東アジアにおける図像資料

『東アジア生活絵引』朝鮮風俗画編は、朝鮮時代に描かれたいわゆる風俗画を素材にして、そこに描かれた生活の諸相・事物あるいは人々の行為について絵引を編纂したものである。韓国においても民俗学の研究は日増しに盛んになっており、国立の博物館や研究機関も活発に民俗調査を行い、民俗の分析を進めている。また近年は図像を用いた研究も歴史学を中心に急速に展開している。しかし、日本の『絵巻物による日本常民生活絵引』のような絵引の編纂は行われていないようである。

財団法人日本常民文化研究所が総力をあげて編纂した『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻は特色ある編纂物である。辞典には多くの絵を描いて挿入している図解辞典という種類があり、語学辞典に多い。挿絵は、語句を説明するために描き起こしたものであり、ほとんどの挿絵は事物を単体で描いて示している。一つの単語の意味を適切に示して、理解を促すことに目標があるからである。しかし、『絵巻物による日本常民生活絵引』はそれとは大きく異なる。絵引のために書き下ろした絵を用いていないことが第一の特色である。過去の特定の時代に描かれた図像を利用し、そこに描かれた事物に名称を与えている。

二つめの特色は、単体に対する名称付与でなく、関連する事物の中で名称付与を行ったことである。事物の相互関係や人々の行為との関係が把握できる絵引であった。日本中世の絵巻物による絵引編纂を継承し発展させるために、それよりも時代を下げて、日本近世を対象とした絵引編纂を試みるとともに、異なる文化におけるほぼ同時代の図像について絵引編纂が可能かどうかを試みることに決めた。それから5年近く編纂を進めてきた。このほど、『日本近世生活絵引』および『東アジア生活絵引』を刊行することで、図像資料の東アジアにおけるあり方を検討できる状態になった。

『東アジア生活絵引』編纂に際して、まず最初に、日本を含め、東アジアの図像資料の制作および残存状況を把握することを試みた。日本の図像資料は豊富である。中世の絵巻物に始まり、近世の各種の図像にいたるまで実に多くの図像が制作され、人々の生活の中に取り込まれていたことが推測できる。絵師や画工は特定の作法と技法に従って絵を描き出す。しばしば粉本と呼ばれる手本にならって描く。それは特定の場所を描いているといっても、実際には実景から離れて、規格化された風景を描く。絵は見る者が期待し、満足する内容で描かれた。専門家の描いた図像は、様々な形態で流布した。近世以降は出版という大量生産による流通が盛んになった。様々なジャンルの文学作品が出版されるようになったが、その大部分の作品は多くの挿絵を挿入していた。また版画という方式で図像が大量に生産され流通した。浮世絵版画は、人々の生活を描き出し、また事件に関わる場面を速報した。あるいは春画が大量に流通した。それらの総体が人々に図像を親しみ深いものにした。人々は日常的に図像に接し、図像を見ていた。

そして時には自ら絵筆を執って絵を描いた。素人絵である。素人絵は、観察した結果を文字では表現できないので、実際の事物を描いてイメージを伝えようとしたものである。絵日記などで日常生活を自ら描くことが行われた。日々の生活の中で接した様々な出来事を、自らの観察の結果として図像化す

ることが絵日記の意味であった。

近代にはいると大量の出版事業によって図像はさらに普及した。学校教育は図像をより一層親しみのあるものにした。そして、美術教育が写生という方法で自ら描くことを教育した。図像は自分たちの周囲に当たり前のように存在するものとなった。

このような日本の近世・近代における図像の豊かさを知った上で、他の東アジア地域の図像のあり方を検討すると、そこに大きな相違があることが分かってきた。当然あると思っていた図像資料が驚くほど少ないのである。中国の江南地方において長年にわたって民俗調査を行ってきたが、その間に訪れた村落において図像資料というべきものに接することは稀であった。もちろん書画の類は少なくない。しかし、地域に即した図像はほとんど存在しない。そもそも図像資料が少ないのではなく、文字資料も含めて地域において作成され、保存されてきた資料は少ないということが判明した。各地の村落社会に残されている文字資料は、日本の村落社会で一般的な、筆で書いた文書はほとんどなく、大部分が編纂された版本であり、次いで多く存在するのが金石文である。前者の代表は族譜であろう。族譜は、祖先から始まり、現世代までの系譜を記録し、現世代の男子成員を全員記載する。通常そこにいくつかの図像が含まれている。祖先の肖像、祖墳の図などである。族譜以外に文字資料もなければ、図像資料もないというのが中国における一般的な姿である。韓国においてもやはり同じであるという。確かに日常生活を描きこんだ図像は非常に少ない。

今回編纂に用いた風俗画は、相対的に少ない図像資料のなかにあって、生活を描き、当時の状況を今に教えてくれる貴重な資料である。

2　朝鮮時代風俗画の内容

朝鮮時代の図像として親しまれているのが一連の風俗画である。韓国の観光土産に作られた栞や小物にもしばしば風俗画の図柄が利用されており、人々に親しまれている。絵引編纂にあたってこの風俗画を対象にすることにした。風俗画は、個別の事象を描いたものが多く、日本の絵巻物のようなストーリーをもって描かれているものではないし、名所図会のように一定の対象について連続して描かれているわけでもない。風俗画は基本的に一枚一枚が独立した存在である。それが描いた作者別にまとめられて名称が付けられているのである。

風俗画に描かれた生活の様々な場面を取り上げ、生活絵引を編纂することにして作業に入った。対象としたのは3点の屏風画を含めて6つの作品群である。これらの風俗画が描いている内容を整理してみると、いくつかの特色が浮かび上がってきた。生活の諸側面が描かれていても、あらゆる場面が対象になっているのではない。特定の内容に偏っているのである。描かれた生活事象を図表1のように、①景観、②衣食住、③社会、④生業、⑤信仰、⑥年中行事、⑦通過儀礼とおおまかに分類してみると、④生業に関する図像は少なからず存在していることがまず注目される。農業生産の各場面を描いた風俗画、特に収穫後の脱穀作業を描いた図はいくつも見られる。家庭内での養蚕や糸紡ぎ、機織りの場面、また筵編みを描いた図が見られる。さらに、大工その他の各種の生業活動を描く図もある。

⑦通過儀礼を主題にした図像も見られる。「平生図」はその代表例である。それに対して、⑥年中行事や⑤信仰に関する図像はほとんどない。年中行事そのものを描いた図はごくわずかである。風俗画が、信仰とか儀礼をあまり描かず、生産関連の場面を対象にしていることは注目されよう。そして、娯楽や遊び、あるいは宴会を描いた図は少なからず存在する。風俗画の関心はむしろそこにあったといってよいであろう。

風俗画は全体として女性を多く描いている。一つは妓女を中心とした遊び・娯楽、あるいは宴会の場面が多いことによる。また、生産・生業の場面でも女性の活動に注目する図が少なくない。機織り、糸紡ぎなどはそれである。そのような生活を描いたものだけでなく、明らかに女性の魅力を表現しようとした図が多く含まれていることも注意される。女性たちが川縁に行って洗濯をしたり、水浴びをしたりしている姿をしばしば描いており、そこでは女性た

表1　選択図像分類一覧

絵画名称		1 耕織風俗図	2 檀園風俗画帖	3 平壌監司饗宴図	4 蕙園傳神帖	5 平生図	6 四季風俗図屏風	計
全数		4曲1双	25葉	3幅	30葉	8曲1隻	8幅	
①景観	農村景観							
	都市景観			2				2
②衣食住	服飾							
	食事		1					1
	住居	1	1					2
	日常生活	1	1		2			4
③社会	家族・親族		1					1
	交際・付き合い				2			2
	交通・運搬	1	2					3
	娯楽・遊び		3		1		1	5
	学問・学習		1					1
	身分・階層			1		4	1	6
④生業	耕起・田植え	2	1					3
	収穫・脱穀	3	1					4
	養蚕・機織り		2					2
	漁業		1					1
	林野・狩猟							
	手工業・職人		4					4
	商業・流通		2		1		1	4
⑤信仰	信仰施設							
	ムーダン				1			1
	堂祭							
	芸能				1		1	2
	その他		1					1
⑥年中行事	正月	1						1
	端午							
	秋夕							
	その他							
⑦通過儀礼	婚礼		1			2		3
	出産・育児					1		1
	葬儀							
	忌祭・節祀							
	墓							
選択図像数		9	23	3	8	7	4	54

ちが上半身を顕わにし、時には乳房をもおおらかに出している。また脚も太股まで出している。それらが女性の性的な魅力を描こうとしていることは明らかである。しばしば、その女性たちを覗き見ようとする男性が描き込まれている。それは両班の若い男性であったり、修行僧であったりする。他方では、夫婦掛向かいの様子を描いた図もある。夫婦が揃って仲良く外出している様相を描いている。

朝鮮時代の身分社会を示しているのも風俗画の特徴である。多くの絵は両班身分を描いている。両班を中心とした官吏たちの細かく区分された階層区分を、笠や衣服の色や形で示している。そして、主として両班たちを相手にした妓女たちが華やかな服装をまとっていることを描いている。風俗画の多くは、妓女たちをまじえた宴会や外出の様相である。その身分差は外出時に利用する乗り物によっても示されている。乗り物の座席に虎皮を敷いてすわり、威張っている両班の官吏と、それに侍って同行する従臣たち、さらにそれに従って音楽を奏でる楽士たちや警護役の武官たちが行列を作っている。それに対して、中人や常民階層の姿も登場する。庶民というべき人々も描かれている。両班の官吏一行を見物する村人もいる。しかし、全体としては支配者層中心である。農村の様子やそこで暮らす人々も描かれているが、そこにも階層差や身分差が示されている。

年中行事や祭祀・祭礼を描いた図が驚くほど少ないことも大きな特色である。日本では四季の移ろいのなかで多くの行事が家や村で行われ、また多くの

人々が集まる大規模な祭礼も少なくない。それらは図像の題材となり、古くから描かれてきた。特に、地域における神事祭礼は格好の題材であった。ところが朝鮮風俗画には、年中行事を題材とした図はほとんどないといってよい。

3　風俗画にみる民俗

風俗画に描かれた諸場面を通して、朝鮮時代の生活、特に農民生活を描いてみよう。

集村を形成する家

朝鮮時代の農村は集村が基本であったことが多くの図に示されている（7、9、52）。各家は屋敷周りをそれほど高くない生け垣で囲み、出入り口には門が設けられている（1、7、9）。門には粗末であっても門扉が付けられ、内外の境界を明確にしている。上層身分の者の家は、生け垣ではなく、築地塀でしっかり囲み、屋敷内が見えないようにしている。門も豪壮な姿になっている（44、46、47、49、50）。一軒一軒の家が屋敷の周囲を囲み、他の家と空間的に区別しようしていることが特色といえる。しかし、多くは完全に密封して閉ざしているわけではない。生け垣も丈が短く、生け垣の上から内部を覗き見ることができる程度のものである。

屋敷内には幾棟もの建物が建てられている（9）。母屋の他に、物置や作業小屋が配置されている。そして広い空間が確保されている。日本でいう庭にあたるものであり、重要な役割を果たしていた。そこは庭仕事の空間であった。多くの庭仕事が描かれている（6、7、8）。そこが時には子供達の遊びの空間にもなった（1）。また、裏庭の一角には台が設けられ、そこには味噌などを入れる大きな甕が置かれている。しかし、屋敷内に井戸を設けていることはほとんどなかったようである。井戸は村中で共同に利用する共同井戸を基本としていた。共同井戸には水を汲み上げるための固定的な装置はなく、各人が家から釣瓶などを持参するものであった（11）。

住居は描写の舞台として示されているが、それらはいずれも床をはってあり、人々は履き物を脱いであがり、床に直接座って過ごしている（49）。床は板の間であり、それに筵や莫蓙を敷いている（1、2）。人々は床に座って暮らすが、その姿勢は男女とも片膝立てを基本にしており、また胡座をかくこともある（1、10、22）。日本のような正座はほとんど見られない。

部屋と部屋の間や外との出入り口には戸が立てられたが、それは引き戸ではなく、観音開きの開閉式であった。引き戸中心の日本と比較して面白い点である。

夫婦が暮らす家族

屋敷を構え暮らしている農民家族を風俗画から把握することは困難である。家屋と共に描かれた人々のなかに家族を見つけると、祖父母から孫までの3世代が共に暮らす直系家族の形態を基本にしていたものと思われる。屋内の作業には3世代が示されている（1、8）。

男女が一緒に歩いている姿は実際に見られたかどうか分からないが、風俗画には夫婦と思われる男女が仲良く外出している様子が描かれている（13、30）。13では、妻が幼い子供を膝に載せて牛に乗り、夫は赤ん坊を背負って歩くというほほえましい姿が示されている。日本の図像には、男女が一緒に行動する姿や夫婦が一緒に外を歩いている様子を描くことは、ほとんどないと言ってよい。その点で朝鮮風俗画の描写は大いに注目され、また公的な道徳規範とは異なる実際があったことが想像される。特に夫婦掛向かいの微笑ましい様子が見られる。

母親や父親が赤子を背中に負ぶうことも当たり前の姿であった（8、9、13、15、30）。負んぶ紐など用いず、両腕を後に回して赤子を負ぶう姿も見られた（54）。日本でもかつてはごく一般的な姿であった。

日常生活

食事・食物は日常生活の中心的な場面であるが、あまりに当たり前なのであろうか、風俗画に描かれることは少ない。食事の様子は、旅や街に出かけたときの食事が描かれている（29、41）。そこでは女

性が調理をし、また給仕をしている。料理屋や食堂ではない、日常の家庭ではどうであったのかは示されていない。唯一描かれているのが、おそらく農作業で忙しく働く日の昼食風景と思われる人々が集まって食べている様相である（10）。食卓に向かって食事をしているのではなく、各人が思い思いに座を占め、自由に食事をしている。食事の際にマッコリを飲むことも示されている。食器を手に持たずに食べるのが一般的な作法であるが、この場面ではみな自由に茶碗を手にして箸や匙を用いて食べている点も興味深い。

洗濯は女性たちによって行われた。川辺に出て、川の水を利用して、岩の上に洗濯物を置いて、砧で打って汚れを落とした。また、川辺では女性たちが沐浴をした。男性たちの関心の対象であったことがうかがわれる図像がいくつもある（12、38、39）。

稲作中心の農業

農業生産では稲作中心であったことがうかがわれる。耕起作業は牛に犂を牽かせて行っていた（4）。注目されるのは、犂を1頭の牛が牽くのではなく、2頭牽き犂が見られたことである（21）。またカレーと呼ばれる鋤で田起こしした（5）。これは大型の鋤に綱をつけ、一人が後から鋤柄をもち、複数の者が引き綱を引いて耕起するものである。このような耕起法は日本では全くといってよいほど見られず、ユニークなものである。荒起こしした土塊を三本鍬や四本鍬で細かく砕いた（4、21）。水田の耕起作業は男性の仕事であったが、畑作は女性が担っていたように見受けられる（4）。

日本において農業生産に関する絵といえば、必ずのようにその中に田植えの様相を描いたものが含まれている。早乙女たちが田の中に入って田植えをする姿は格好の題材であった。ところが、朝鮮風俗画には田植えを描いた絵がまったくないのである。不思議なことといわねばならないが、これには田植え農法の全面的普及が17世紀以降と非常に新しいという事情が関係しているのであろう。

収穫作業は屋敷内の庭で行われた（6、7、8）。そのために前庭は広く確保されていた。もっとも注目されるのは、稲穂から籾を落とす方法として打撃法が採用されていたことである。打撃法は、唐竿を用いての脱穀（6）だけでなく、自然木を利用した脱穀台に打ち付ける方法も行われていた（7、20）。日本においては麦の脱穀には打撃法が行われてきたが、稲は早くから扱き箸、千歯扱き、そして近代には足踏み脱穀機と、稲穂を扱いて脱穀することが行われてきた。打撃法は現代中国でも一般的に行われており、その共通性が注目される。

庭仕事は、打撃法による脱穀を除くと、基本的には東アジア共通の用具による作業であると言え、そこには中国の影響を見ることができよう。唐竿、摺臼、碓などはいずれも中国からもたらされた道具と考えられ、その点で日本と同じである。そのなかで、中国で発明され、日本でも普及した唐箕が見られないことも注意される点である。

農業以外の生業についても具体的な様相を知ることができる。鍛冶屋（26）、煙草刻み（27）、屋根葺きと大工（25）なども示されている。大工道具は基本的に中国のものと共通しており、操作も前方へ押して行う。日本が同じ道具でも専ら手前に引くことと比較して興味深い。

女性は頭、男性は肩

物資の運搬法として頭上運搬が盛んに行われていた（1、3、11、30、31、34、38、52、54）。様々な物が頭の上に載せられて運ばれたが、運んでいるのは日本と同じように女性である。男性の頭上運搬は、わずかな例外（34）を除いて、見られない。男性の運搬法は背負梯子であるチゲを用いるものであった（3、18、20、30）。また、背負梯子に天秤棒を固定させた運搬具もあった。天秤棒の両端に水瓶を下げて運んだ。水を運ぶのに、女性は頭上運搬をし、男性は天秤棒を用いている（34）。

頭上運搬もチゲによる運搬も、運ぶことができる量は多くなく、また遠距離は困難であった。そこで畜力が大きな存在となっていた。馬と牛である。全体としては馬による運搬が多かった（14、15、34）。馬には物資だけでなく、人も乗って移動した（13、32、34、45、46、47、48）。牛も運搬に用いられた

が（5、13、15）、同時に農耕用の役牛でもあった(21)。

馬の利用と関連して注目されるのが、蹄鉄の普及である（28）。蹄鉄は、日本では明治以降に欧米から導入されることで始まった。それまでは藁で作った馬の沓を用いていた。ところが、朝鮮時代にすでに蹄鉄が普及し、蹄鉄打ちが村でも行われていた。中国でも当時蹄鉄は採用されていなかったので、その独創性は大きい。

支配者と輿

両班の上級官吏の移動に際しては、輿が用いられた。輿は肩で担ぐのではなく、肩から吊し紐を下げて輿を低い位置で支えるのが基本であった(44､52)。そして、輿を馬につけて運ぶことも行われた（45）。また、輿の下に車輪を付けている（46）。日本においても牛車のように車輪を付けて人間を運ぶ用具は存在したが､近世には特定の儀礼のみの用途となり、一般には車輪付き運搬具は発達しなかった。荷物の運搬でも同様の傾向があり、荷車、大八車に限定されていた。人の移動には、徒歩以外では、馬の背に乗る方法と駕籠や輿に乗って人力で担がれる方法が一般的であった。朝鮮時代も基本的には同じであったことが窺えるが、両班身分の官吏たちの公的な移動には、車輪付きの輿が利用されたことは注目される。

信仰と年中行事

現代の韓国においてもムーダン（巫女）の活躍が見られるが、風俗画の中にはあまり描かれることはない。唯一の絵が民家で行われたクッの様相を示すものである（42）。一人のムーダンが、依頼者である女性たちを前に、二人の楽士の伴奏で扇を手にして舞い踊って祈っている。

正月の15日は満月の夜であるが、屋外に出て満月を拝むことが行われていた（9）。また同時に、この日に棹の先端に藁束を稲穂のようにして縛り庭先に立てることが行われていたことも示されている。棹の先の稲藁は豊作の様相を示すもので、予祝儀礼の一つである。日本の小正月も多くの予祝儀礼や呪術が行われてきたが、朝鮮時代にも予祝儀礼があったことを示している。

風俗画には、仏教の活動や寺院中心の生活は描かれないが、僧侶が街や村に出て喜捨を受ける姿が見られた。秋の収穫時期に家々を訪れ、家の主人に向かって喜捨を受けようとする僧侶が見られる（7）。また僧侶姿の者が街頭に出て、占いを行い、喜捨を受けている様子も見られる（31）。鉦や太鼓を打ち鳴らしているが、その太鼓は弓に付けられているようにも見え、梓弓の太鼓の可能性もあるが、共鳴用の板に太鼓を付けたとも考えられ､確定はできない。宗教者という性格よりも芸能者というのが相応しい人々の活躍も見られる（54）。

身分階層と通過儀礼

Ⅴの平生図を中心に、誕生（50）、結婚（48）、年祝い（49）などの通過儀礼が描かれている。それらは、いずれも両班ないしは中人でも富裕層の儀礼である。結婚式当日、新郎が嫁迎えに行く様相が描かれ、そこには生きた雁を持参する（32）、あるいは木製の雁を持参する（48）のが描かれ、当時の特色を示している。一般の農民も婚姻儀礼などでは、両班身分の服装をし、儀礼を行っていた。

4　風俗画による絵引編纂の意義

朝鮮時代の風俗画による絵引編纂を試みた結果、朝鮮時代の生活文化を具体的なイメージを伴って理解することができたと言えよう。全般的な印象としてではなく、個別具体的な事物や行為を把握し、それらの名称を確定することで、実態としての生活文化が理解でき、図像が資料として活用できるようになった。朝鮮・韓国における生活文化の歴史的展開を検討する際には、このような個別事物や行為も適切に把握した上で、その歴史像を組み立てるべきであろう。また、東アジアにおける各文化の共通性と相違を明らかにするためにも図像資料を絵引化することが有効な方法であることが分かった。

ただし、図像資料には限界があることもまた知っておかねばならない。朝鮮風俗画は描く対象や画題

がかなり限定されている。しかも事物や行為が有機的につながっている場面が比較的少なく、また詳細、微細に描かれている図もそれほど多くないと言える。その限界を見極めた上で、今後も積極的に絵引編纂が試みられる必要がある。本書はその始まりの試案本である。

（ふくた・あじお）

【参考文献】

朝岡康二　1993『日本の鉄器文化ー鍛冶屋の比較民俗学ー』（考古民俗叢書）慶友社
朝倉敏夫編　2003『「もの」から見た朝鮮民俗文化』新幹社
伊藤亜人監訳　2006『韓国文化シンボル事典』平凡社
沖縄・韓国比較社会文化研究会編　2001『韓国と沖縄の社会と文化』第一書房
金光鉉　1991『韓国の住宅ー土地に刻まれた住居』（建築巡礼20）丸善
国立国語院編（三橋広夫・趙完済訳）　2006『韓国伝統文化事典』教育出版
杉山晃一・櫻井哲男編　1990『韓国社会の文化人類学』弘文堂
竹田旦　1983『木の雁ー韓国の人と家』サイエンス社
宮嶋博史　1995『両班（ヤンバン）』（中公新書1258）中央公論社